

変わる**高校教育**

学力観の変化と 学びみらいPASS



学力観の変化、新学習指導要領への移行、スクール・ポリシーの策定などをきっかけに、育てたい生徒像や、生徒に身につけさせたい資質・能力を見つめなおす高校が増えています。

そして、探究活動に力を入れたり、各教科でパフォーマンス課題を取り入れたり、学校行事や部活動などを「資質・能力」の観点から位置づけなおしたりするなど、さまざまな教育改善が進められています。

さらに、それらの教育活動を通じた生徒の成長の把握や、学習活動の成果検証を各高校が充実させています。

そうした中、教科学力だけでなく多面的な力を測定するアセスメント「**学びみらいPASS**」(MMP)の導入校が増えています。

本特集では、13校の取り組みから、学力観や高校教育の変化について考えます。

CONTENTS

「学びみらいPASS」導入校座談会

東大寺×灘×洛星×洛南

—各高校が見据えるこれからの教育—

➔ p4

MMP開発の経緯とアセスメント概要

➔ p12

MMP活用事例

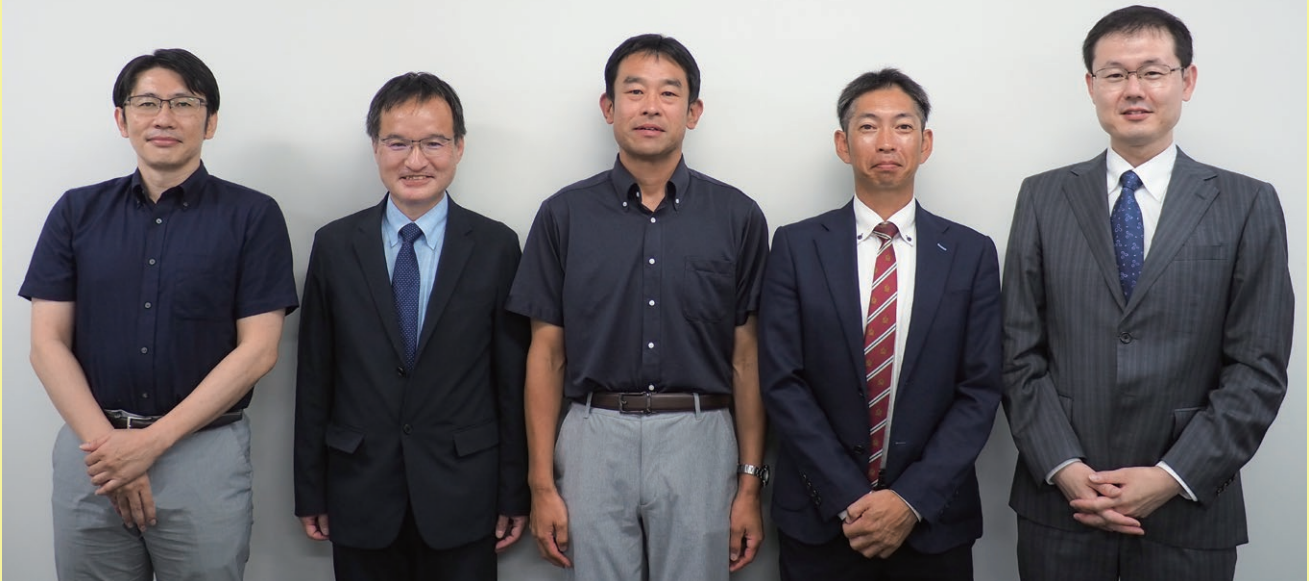
➔ p14

- 札幌市立札幌開成中等教育学校
- 宮城県仙台第三高等学校
- 茨城県立並木中等教育学校
- 鷗友学園女子高等学校
- 愛知県立刈谷高等学校
- 須磨学園高等学校
- 六甲学院高等学校
- 佐賀県立佐賀西高等学校
- 鹿児島県立鶴丸高等学校

「学びみらいPASS」導入校座談会

東大寺×灘×洛星×洛南

—各高校が見据えるこれからの教育—



(左から) 河合塾・山口、東大寺学園高校・沖浦先生、灘高校・池田先生、洛星高校・丹羽先生、洛南高校・小林先生

高校紹介

育成をめざす資質・能力と教育の特徴

山口 本日は、お忙しいところお集まりいただき、ありがとうございます。初めに各校の特色についてご紹介いただけますでしょうか。

沖浦 東大寺学園の沖浦と申します。今年で進路指導部長4年目になります。本校は校則もありますが、制服がなくルールも少ない学校で、生徒をのびのびと育てることを一番の目標においた学校です。生徒たちは、高2秋の文化祭、あるいは運動部であればインターハイ予選などをさまざまな活動の集大成と位置づけています。それが終わると、受験勉強を

スタートするというスタイルです。

池田 灘高校の池田と申します。18年間、兵庫県の公立高校に勤め、ご縁があつて灘に移りました。今年で6年目になります。私は高校生の年代の子供たちの居場所を作る活動を学校外でも行っています。生徒だけでなく、教員も自由に活動させてもらえる学校です。学校や教員は生徒に細かな指示を出しませんので、生徒は指示待ちではなく、自ら企画して活動します。学校はそれらの活動

の実現をサポートするために動きます。生徒たちがきっかけをつくることも多いです。

丹羽 洛星高校で教育部進路指導主任をしている丹羽と申します。進路指導主任をして3年目になります。本校も自由な校風です。知識だけでなく「全人教育」、人の痛みに気づくことができる人間性の育成に加え、学ぶ楽しさや生徒の興味・関心を伸ばすことをめざして、さまざまな教育活動に取り組んでいます。本日は

座談会参加者 (本文中、敬称略)

- 東大寺学園高等学校
- 灘高等学校
- 洛星高等学校
- 洛南高等学校

沖浦 徹二先生
池田 拓也先生
丹羽 亮太先生
小林 孝先生

- 司会
河合塾 山口 大輔
(学びみらいPASS開発担当)



東大寺学園高等学校（奈良県）

沖浦 徹二 先生

学校の特徴

生徒をのびのびと育てることを目標としており、制服もなく、ルールも極めて少ない。

大学受験は最終目標ではなく通過点と位置づけている。

6年間で学業のみならず、学校行事や部活動など幅広い活動を通じ、人間性の育成を行うことをめざしている。クラブの加入率も高く、兼部している生徒も多いことから、運動部、文化部、同好会を合わせると加入率は100%を超える。

2022年度実施アセスメント：
(1年次) PROG-H、LEADS

座談会を通じて勉強させていただくことを楽しみにしています。

小林 洛南高校の小林と申します。本校の教育は、前校長の言葉を借りれば、卒業後に振り返った時、良かったと思うことができる高校生活を送らせる、つまり、大人になった時に教えが生きるような教育をめざしています。今日は座談会を通して各校の取り組みを学びたいと思います。

導入の目的

生徒の適性を客観的に把握し キャリア教育や面談に活用

山口 ありがとうございます。まず、各校の「学びみらいPASS」（以下、MMP）導入に至った経緯をお話いただけますでしょうか。

小林 導入の理由として大きいのは、

保護者とのコミュニケーションです。保護者は生徒の進路について、ご自身がご希望する進路像というものがあります。しかし、それが時として生徒の特性にそぐわないと思われることもあります。たとえば、親は医学部に進学させたいと考えているが、生徒自身の興味・関心は文系の学問の方が近い場合などです。そのことを保護者に説明するために、客観的な資料が必要だと感じ導入しました。

MMPの個人報告書は、職業適性・学問適性だけでなく、コンピテンシーやリテラシーも一緒に示されています。その点でも保護者の信頼を得られていると感じます。

山口 洛南高校はMMPの採用時期が早く、継続して長く採用していただいています。この辺りの理由をお話いただけますでしょうか。

小林 本校では10年ほど前までは、模擬試験などの採用は学年により判断していましたが、現在は3学年の担当者が集まって検討しています。MMPの採用については、一部の学年だけではなく他の学年でも同様に取り組んだ方がデータの信頼度が高まります。そのため、私からお願いしたところもありますが、それ以上に保護者の反応が変わったことが、他の学年も採用することになった一番の理由です。

山口 生徒さんたちの反応はいかがでしょうか。

小林 生徒たちは本当に楽しんで個人報告書を見ています。学問適性や職業適性、コンピテンシーやリテラシーについては、返却時に指標の意味も説明しています。生徒は、コンピテンシーが高い、低いなどをお互い

に見せ合って、純粋に楽しんで見ているように感じています。

丹羽 本校も理系や医学部志望が増えてきており、それ自体は悪くはないのですが、もっと各自の適性を把握した上で進路をしっかりと決定してほしいという思いがありました。以前は、進路適性を知るための別のサービスを利用していましたが、職業や学問の適性に加えてコンピテンシーなども把握し、進路適性をより細かく知りたいと考えてMMPを採用しました。

本校の生徒も個人報告書の返却時は大騒ぎして喜んでいました（笑）。結果は保護者面談の際の話のネタにもなり、客観的な指標として、一度立ち止まってお子様の進路を考えるきっかけになっているようです。また、担任としても生徒の適性を把握できるので、面談時に生徒の話を鵜呑みにせず冷静に受け止めるための1つの材料になっています。

本校は高校1年次と2年次の2回、PROG-Hを受けていますが、経年で見えていくとリテラシーの伸びが分かります。一方でコンピテンシーを伸ばすのは難しいと感じています。だからと言って、コンピテンシーを無理に伸ばそうとするのではなく、クラブ活動や生徒会活動など学校教育の中で、こうした力を育んでいこうという思いです。

小林 本校は主に文理選択の時に1回だけ受けていますが、洛星高校さんが2回受験しようとお考えになった理由は何ですか。

丹羽 1回受けて終わりにするのではなく、各生徒が自分の力を伸ばす意識を持ってほしいという思いがあ

ります。

小林 生徒さんは1年次から2年次にかけてリテラシーやコンピテンシーの変化を意識しているのですか。

丹羽 意識しています。もっと真剣に受けておけば良かったと言う生徒もいます（笑）。それだけ生徒たちの理解が進んで、浸透してきていると受け止めています。生徒たち、そして担任の教員も2回受けて良かったと言ってくれています。

池田 2回受験することで生徒の変化を含め、保護者や先生方の捉え方は変わりますか。

丹羽 変わりますね。導入当初は進路が中心になって動いていましたが、生徒の変化を見て、学年が主体的に指導するようになり、担任が自分事として捉えるようになりました。それが生徒や保護者への浸透につながっていったと思います。

導入の目的

**生徒に“現在地”を意識させ
リテラシーやコンピテンシーの
育成につなげる**

池田 私は高1を担当していますが、

生徒には文理選択も含めて、将来の自分のことをしっかりと考えさせたいと思ってMMPを導入しました。本校も医学部をめざす生徒が多いのですが、その中には、他の学問や職業に適性がありそうな生徒もいます。

理系の仕事として見れば、確かに医師は分かりやすく、コロナ禍で社会的な意義も強く意識されるようになりましたので、生徒が医学部をめざす気持ちも理解できます。ただ、世の中にはさまざまな仕事があります。進学先の大学に関わらず、少なくとも学部選びはもっとよく考えてほしいと思ったことがきっかけです。

また、本校は自由な学校ですが、それがコンピテンシーを育むことにつながっているかという、必ずしもそうとは言えないと思います。だからと言って、コンピテンシーを高めるために、生徒に無理に何かをさせるということではなく、まずはMMPによって生徒自身の現在地を知らせることに意味があると思います。1学期の最後にMMPを受けましたが、その事前と事後には外部講師に話してもらうなどして、詳しい解説を生徒にしています。



灘高等学校（兵庫県）

池田 拓也 先生

学校の特徴

文章化された校則がなく、生徒の自立と自律を促す自由な校風。学校行事、生徒会活動、クラブ活動さらには自主的活動を通じて、社会人に必要な「自主」と「協働」の力が育ち、お互いの個性を尊重し合う姿勢が自然に生まれている。

2022年度実施アセスメント：
(1年次) PROG-H、R-CAP、LEADS

沖浦 導入検討に当たり、河合塾の大学受験科生（既卒生対象コースの生徒）のMMPの結果を見せていただきました。「計画立案力」「実践力」「行動持続力」が低かったことに驚きました。だから現役で合格できなかったのかもしれませんが、それが本校の生徒はどうなのか、強い関心を持ちました。そこで、高1の学年主任と一緒にMMPの説明を聞き、高1担任団が採用を決めました。

本校も生徒に細かく指示をする学校ではありませんが、少なくとも担任団がリテラシーやコンピテンシーの分析結果を知ることは、とくに今の時代には、大事なことだと思います。初めて受験しますので、具体的な活用方法についてはこれからの検討事項です。

山口 「行動持続力」「実践力」「計画立案力」は学習習慣や学習態度と結び付きやすいです。ただ、これらが低いから現役合格できなかったと





洛星高等学校（京都府）

丹羽 亮太 先生

学校の特徴

大学進学のみならず、就職後やその先も見据え、各生徒が持っている能力を引き出し、伸ばす教育を実践。自由な校風のもと、生徒はクラブ活動や課外活動、生徒会活動にのびのびと取り組む。学校改革を進めつつも、伝統を大切にするなど調和の取れた教育をめざす。

2022年度実施アセスメント：

（1年次）Kei-SAT、PROG-H、R-CAP、LEADS

（2年次）PROG-H、LEADS

いうわけではなく、高校在学中にこれらを意識する経験があまり無かったことの現れではないかと思っています。進学校の生徒さんはリテラシーがとても高いので、普段は意識をしていなくても、いろいろなことがある程度できてしまうのです。

自分をコントロールする系統の力で、「感情制御力」「自信創出力」があるのですが、模試の成績が良かったのに本番で力を発揮できない、いわゆる逆転不合格のような現象がおきる生徒は、これらが低い傾向にあります。こうした自分をコントロールする力は、一朝一夕で鍛えられるものでもありませんし、問題集や参考書があるわけでもありません。これこそ低学年次で測って、生徒たちに意識させて、育成していく必要があるのではないかと思います。

導入の効果

生徒の状況を客観的に把握することで 面談や声掛けがスムーズに

池田 一般的に、受験指導する場合は、本人に志望校を変えるよう助言することもあります。なかなか難しい局面だと思います。誰がいつ決断するのかと言う一番は生徒自身です。そのためにはMMPで自分を知ることが大切になってくると思います。ところで、河合塾の大学受験科では進路指導にどう活用しようと考えてMMPを受験しているのですか。

山口 予備校の場合、実質8～9ヵ月でいかに受験学力を上げるかが重要ですので、MMPをなぜ実施しているのか、疑問をお持ちになるのは当然のことだと思います。私たちもこの短期間でリテラシー・コンピテンシーを上げることは難しいと考えています。

大学受験科では入塾後に面談を行って、各生徒の特性を掴むのですが、MMPによってより早めに生徒の特徴を掴むことができます。それは早めに対策を取ることもつながります。スタートが早くなります。

また、チューターの中には若手もありますが、MMPを活用することで、面談の質を担保できます。コンピテンシーの中でも、先ほど挙げた「行動持続力」「実践力」「計画立案力」など学習習慣や学習態度にかかわりが深い力に注目することとしています。さらに、本番に弱い可能性がある生徒を早く見極めることで、少しでもプレッシャーのかかりそうな時

には先んじてチューターから声かけができます。このようにポイントや時期を絞って活用しています。

MMPの本来の使い方は、低学年次に実施して、社会で必要な力や資質・能力が生徒の中で芽生え始めていることを知ってもらい、自分自身に興味を持ってもらうことです。自分は何にやり甲斐を感じるのか、何にワクワクするのかなど、自己理解ができている生徒はいざという時に強いのです。自分を知った状態で、スタートラインに立ってほしいと思っています。

小林 本校は2015年度からMMPを導入して、それを継続してきて良かったと思うのは、初めて担任を受け持つような若い教員も一定の指標を持つことができることです。かつては、ベテランの教員からアドバイスをもらうことで、経験が浅い若手教員も進路指導を含めた生徒指導ができていました。ただ、団塊世代が退職し、教員の入れ替わりが激しくなると、経験を積んだベテランが、若手一人ひとりに自分のノウハウを伝えることが難しくなってきました。そうした若い教員が担任として前面に立たなくてはならない時、MMPは優れたツールになります。

たとえば、文理選択1つをとっても、私が経験的に感じている生徒の適性と、R-CAPの結果はほぼ一致していて、信頼に足る分析だと思っています。もちろん、ベテラン教員は生徒との何気ないかわりの中で、各生徒のタイプを把握して指導に生かしますが、初めて高校生の担任をする教員の場合、なかなかそうはいきません。その点、MMPには教員用ガイ

ドブックが付いてきます。マニュアルに頼り過ぎるのは問題ですが、これが指導の指針にもなりますので、ベテラン教員が教員一人ひとりに詳しい説明をしなくても良くなりました。進路指導にもかかわる立場としては心強く思っています。

小林 池田先生と山口さんのお話を聞いていて、私も担任が生徒の状況を事前に把握しておくことで、声かけができたり、心の準備ができたりするのは意味のあることだと思います。ところで、河合塾ではMMPの結果をもとにチューターがアドバイスをしたことで、どのような変化があったかなどについて分析はされていますか。教員側が心の準備をして、アドバイスをしたことが結果に反映するとなれば効果がより見えやすくなります。

山口 現時点でそうした分析はありませんが、今後取り組んでみたいと思います。ただ、どのようなデータを用いて測定するかが課題となりそうですね。

沖浦 そこは定量的なデータでなくても、たとえば、こういう声かけをしたら、こういう結果になったなど具体例を示していただけるだけでも、我々の指導に役立つと思います。また、我々からも在学中の指導状況をチューターさんにフィードバックすれば、お互いにとって良いことではないでしょうか。

山口 ありがとうございます。実は今回、大学受験科生がMMPを受験するにあたり、塾生のいろいろな事例を集めて、MMPの結果と対比させる試みをしました。たとえば、「課題発見力」が低い生徒は、参考書や

勉強法などで他人の真似をする場合が多く、自分の課題を明確に捉えていないなど、多くの傾向は見えてきました。まだ、感覚的なところもありますので、さらに分析をしてみたいと思います。

池田 感覚的と言えば、本校のMMPの結果を見て、8割方は私の感覚と一致していました。これまで感覚的だったものが可視化されたと思っています。客観的に示されることで、生徒にとっても思うところがあるはずです。中には他人に言われなくても、自分のことはよく分かっていると思っている生徒もいますが、分析結果をきちんと見つめさせることが大事だと思います。測定された結果に向き合い、それを受け入れることが大切です。先ほどの山口さんの「自分に興味を持ってほしい」という言葉で腑に落ちました。生徒が自分自身をきちんと見つめることから進路指導はスタートしないといけないですね。

導入の効果

教員の入れ替わりが進む中で指導の継承につながる効果も

小林 MMP採用の動機の1つには、教員の育成という課題がありました。先ほどもお話しましたが、ベテラン教員は職人芸のようなノウハウを持っていますが、それは何年も経験を積み重ねて得たものです。若い教員が即戦力として同じような指導ができるかと言えば、なかなか難しいところがあります。そういう意味で、即席かもしれませんが、生徒把握ができるツールを最初に与えられるの



洛南高等学校 (京都府)

小林 孝 先生

学校の特徴

中学、高校で受けた教えが、卒業後、大人になった時に生きる教育を目標としている。生徒の主体性を尊重しつつも、教員による丁寧できめ細やかな指導が学校の特徴。文武両輪の総合校として、課外活動が活発なコースもあり、全国でトップレベルの運動部もある。これらの生徒と難関大をめざす生徒とは、お互いの良さを尊重し合い、体育祭では文武の枠を超えて一丸となる。

2022年度実施アセスメント:

(1年次) PROG-H、R-CAP、LEADS

※Kei-SATの代わりに、自校で全統高1模試の結果を紐づけて利用

は大きな意味があると思います。

池田 今のお話は、大量に団塊の世代が抜けた後、次の核となる世代が少ないなど、年齢構成の偏りが課題なのではないでしょうか。

小林 それだけではなく、私は世代間の違いもあると見ています。若い教員には、ベテラン教員になかなか聞きづらいことがあるようです。行事などの進め方でも、同期グループ内の誰かが得た情報で一気に動いてしまうことがままあります。しかし、「誰かに伝わった情報」は必ずしも他の全員に当てはまる内容とは限らないことがあります。

池田 世代間であったり、世代の中でも分断があったりして、知の伝達が滞るといえるのか、うまく伝わっていないためにノウハウの蓄積が難し

くなっているのでしょうか。この辺りは援助を受ける力、「受援力」が足りないのだと思います。本校の生徒も人に頼ることが「恥ずかしい、格好悪い」みたいで、なかなか人に頼れない様子を感じます。いくら勉強ができてても全てのことが分かるといのは無理ですから、他者に頼ることができればいいのですが…。おそらく社会全体に、分からないことは何でも聞いても良いという空気感が無いのだと思います。

沖浦 教員が分からないことを素直に他人に聞けないと、生徒もそうはならないですね。本校でも年配の教員は表計算ソフトの使い方などを気軽に聞いていますが、若い教員には遠慮があるようですね。

池田 でも、若者は自信を持っていることでは積極的になれます。だから、本校の生徒たちも学習支援のボランティアは好きですね。ただ、知らないところに飛び込むのは躊躇します。そこで、梯子をかけるのが学校や大人の役割ではないかと思っています。

さまざまな経験の場を用意することも大事ですが、半強制的に取り組ませることができるのは、実は学校という仕組みの中にしかないのではないのでしょうか。生徒が嫌がるようなことでも、経験させることが必要なこともあります。そうした経験の場を、リアルな人間関係の中で提供し続けるのが学校の価値ではないかと思っています。

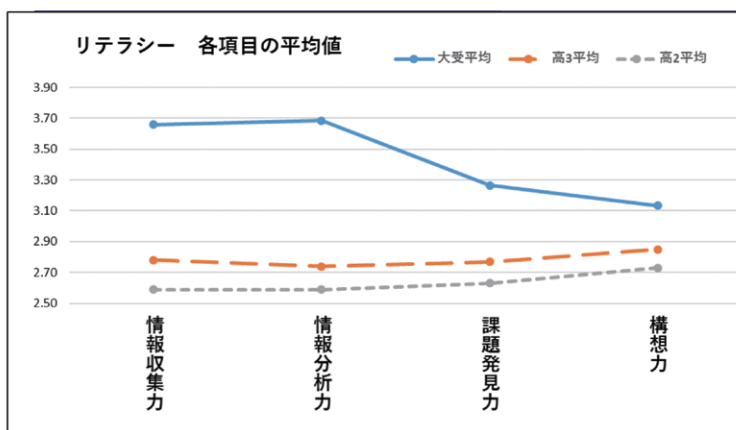
今後の高校教育

生徒の主体性を育むためには待つことが必要に

山口 冒頭に自由な校風のお話がありました。生徒に自由にさせるというのは主体性の育成につながると思いますが、一方でご心配もあると思います。そこでの課題などはありますか。

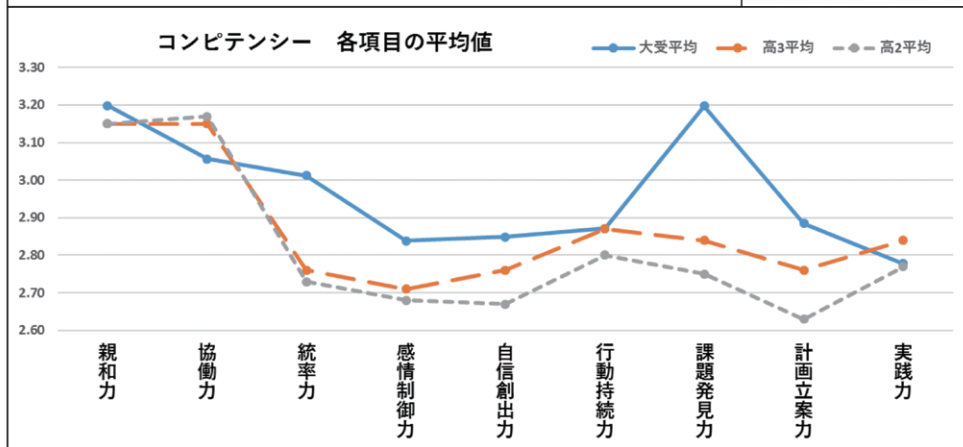
丹羽 本校の場合は、教員が結構おらかに生徒を見ている部分があります。教員から見れば、きちんとできていないことも多々あると思いますが、それを我慢して見えています。6年間という期間があることで我慢ができるのかもしれない。

参考資料 河合塾大学受験科生の入塾時のMMP状況



[補足]

縦軸：MMPの項目別のレベル(1～5の5段階)の平均
大受平均：河合塾の近畿地区の校舎に在籍していた大学受験科生(既卒生)を対象に、2021年4月に実施したMMPの平均
高3平均、高2平均：過去数年分のデータの平均
※リテラシー、コンピテンシーの構成要素についてはp13参照



また、上級生が下級生を教える縦のつながりが強いことも大きいと思います。本校では「クリスマスタブロー」という行事がありますが、上級生だけでなく卒業生が教えに来ることもあります。こうした縦のつながりが生徒の中に責任感を生んでいます。

沖浦 自由と言っても、最初は教師がある程度の枠組みを作り、生徒はその中で活動します。学年が上がるに従って、活動の枠を広げて教師が手をかける部分を減らしていきます。高校生ぐらいになるとほとんど生徒に任せています。時には失敗もしますが、その時、助言を求めてきたら教師はアドバイスします。ただ、失敗も大事な経験だと思います。失敗から学んで、次にどうすれば良いかを生徒自身が考えますからね。こうした生徒と教師間でのキャッチボールを重ねながら、徐々に手を離していくようなイメージです。

小林 本校は、教員がかなり丁寧に指導します。生徒の段取りをしたり、裏方として取り仕切ったりすることもあります。こうした校風の背景として、保護者や生徒が本校の手厚い指導を期待して入学しているという前提があるのではないかと考えています。

池田 中学受験の塾業界では、各校の校風などの色分けがされています。そのような外的要因によって、入学する前から、保護者や生徒が手厚い指導を期待していたり、あるいは自由な校風を期待していたりといった前提はあると思います。

また、能力の問題ですが、生徒の行う結果に一定のレベルを求めると、



どうしても大人が介入しなければなりません。それを求めなければ生徒の能力は関係ありません。学校側には生徒をリリースする勇気が必要です。では、どの範囲までリリースすれば良いのかという話になりがちですが、私は全部だと思っています。ただし、問題が起きれば当然、学校も教員も対処します。そうした覚悟ができるかどうかではないでしょうか。

小林 池田先生がおっしゃったように、結果がどうであれ生徒たちが主体的に取り組んだことを認める文化が学校には必要ですね。生徒が自主的に行った活動でも、結果が良くないと担当した先生方が責任を感じるというところがありますが、生徒に任せた時、出てきた結果に教員が耐えられるかどうかが重要なポイントですね。

沖浦 小林先生がおっしゃったことは非常に大事だと思います。本校も自由な校風ですが、教員の心の中には、生徒の取り組みに対して一定の成果を求める気持ちはあると思います。そこで助言するのか、我慢するのかというところでは、我々も気持ちが揺れ動きます。

丹羽 本校も以前と比べると、大人

が介入した方が良いのではないかと、という雰囲気が出てきたように感じています。ただ、これは学校に限らず、社会全体にそうした風潮があるのではないのでしょうか。

山口 先生方の中にも世代による変化が見られるようですが、保護者の教育観もあと10年もすればかなり変わるのではないのでしょうか。

池田 すでに変わりつつあると感じます。本校でも、どうしても東大進学だけにこだわるというばかりではないと思います。

沖浦 それは私も感じています。コロナ禍が影響しているのかもしれませんがね。

小林 そこはある意味での豊かさの現れかもしれません。保護者の教育観の変化は、この先も必ず起こってくると思います。

山口 今後、保護者の教育観や社会の価値観は変わっていくでしょうが、本日の先生方のお話をうかがっていて、各校の教育は必ず残っていくものだと強く感じました。

本日はMMPに加え、先生方の教育に対する思いまで幅広く語り合っていたいただき誠にありがとうございました。

MMP開発の経緯とアセスメント概要

開発の経緯・コンセプト

社会が変化する中で学力観も変化

グローバル化の進展、AIなどの情報技術の革新、生産年齢人口の急減などを背景に、産業構造が大きく変化の中で、社会で求められる力も変化している。

決められたことを早く正確に行う力や、再現する力だけでなく、知識をもとに課題を発見し解決する力や、主体的に働きかける姿勢、周囲の人たちと協働で取り組む姿勢などが求められている。また、先々を見越して自身をどう成長させていくかを考え、学び続ける姿勢を身につけることも重要になっている。

このように変わりゆく時代にあって、子どもたち一人ひとりが自立して生きていくためには、変化に対応できる力が必要だ。

そうした力を育成するため、学校教育の現場でも、基本的な知識の習得にとどまらず、知識の活用や創造性、生涯を通じて学び続ける基礎的・汎用的な能力（ジェネリックスキル）習得の必要性が、さまざまな形で提唱されている。

新しい学習指導要領では、「学力の3要素」などを踏まえつつ、子どもたちに育むべき資質・能力を「三つの柱」で整理するとともに、その資質・能力を育成するために教科・科目等の指導内容を見直し、授業改善の姿も示された。

河合塾では、こうした学力観の変化や、高校教育の変化を背景に、いま求められている「新しい学力」を多面的に測定するアセスメントとして、「学びみらいPASS」（MMP）を開発し、提供している。

テスト構成・内容

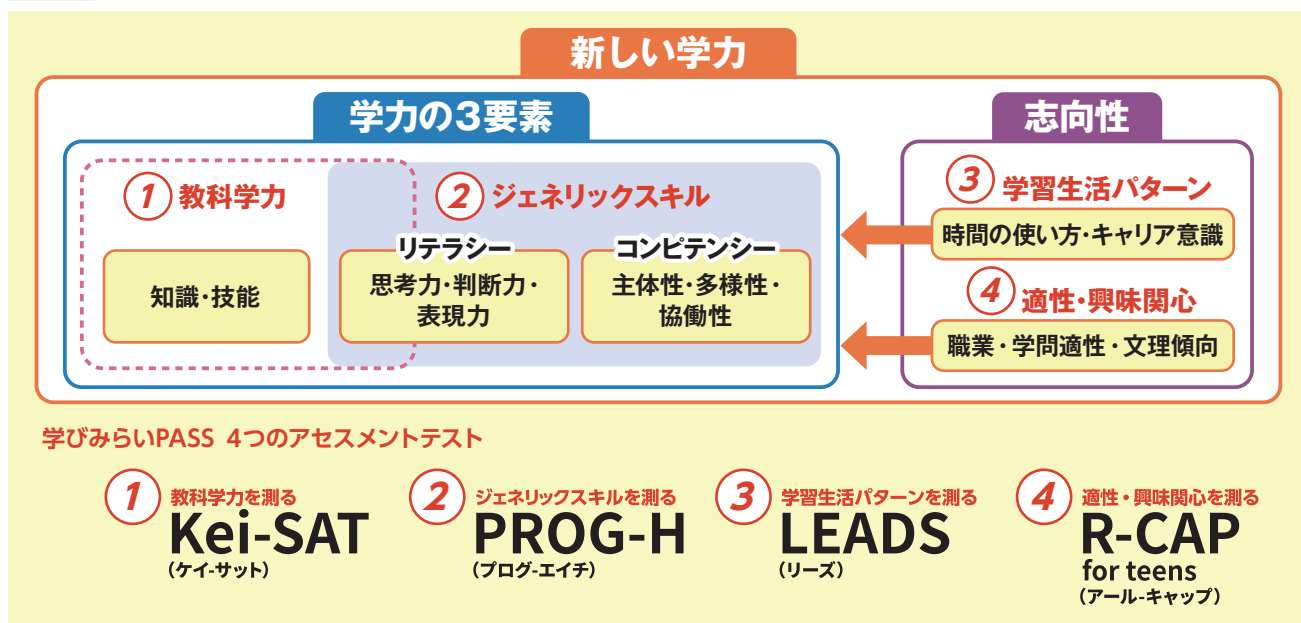
4つのテストを組み合わせ

これから求められる力を多面的に測定

MMPで測定する「新しい学力」は、＜図表1＞の通りである。「学力の3要素」とされている「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」と、学習生活パターンや適性・興味関心を4つのテストで測定する。

4つのテストの概要は＜図表2＞をご覧ください。

図表1 新しい学力とMMP



図表2 MMP4つのアセスメント概要

教科学力を測る
Kei-SAT

(ケイサット)

全学年共通の学力尺度で教科学力の到達度を確認

- 高校生として身につけるべき**教科学力の到達度**を確認
- 英語、数学、日本語、古文（高2のみ）、古典（高3のみ）で実施
- 全学年共通の学力尺度であるスコア（100～700）で測定し、7段階で評価
- 項目反応理論（IRT）に基づき、学習進度などに左右されずに学力伸長を正確に把握

ジェネリックスキル
を測る
PROG-H

(プログエイチ)

学校や社会で求められる「ジェネリックスキル」を測定

- リテラシー（知識を活用して課題を解決する力：4要素）、
コンピテンシー（経験から身につく行動特性：3領域9要素）を測定
- 現実的な場面を想定して問題を作成
- 毎年20万人以上の大学生が受験する「PROG」と同一の基準で評価し、高校から大学につなげて成長を可視化

学習生活パターン
を測る
LEADS

(リーズ)

「時間の使い方」や「キャリア意識」から指導ポイントを発見

- 日頃の**学習習慣**や**生活リズム**をアンケート形式で解答
- 友人関係や進学・就職意識の現状を把握
- 日常生活の見直しやキャリア意識向上に向けた指導に活用可能
- 「学校と社会をつなぐ調査」^(※)を基に開発

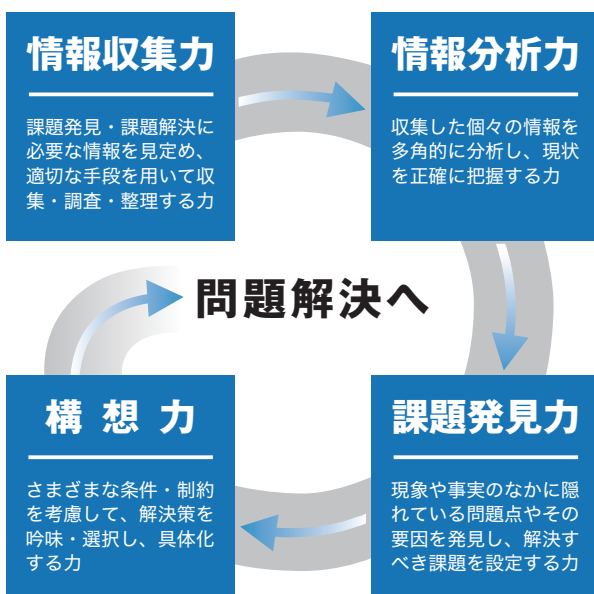
※河合塾と桐蔭学園・溝上慎一理事長による共同調査。2013年度から10年間の追跡調査で、学校での学習や日常生活が大学や社会に出てからどのような影響を及ぼすかを分析

適性・興味関心を測る
R-CAP for teens

(アールキャップ)

職業・学問の視野を広げ、文理選択や進路面談に有効

- 興味や志向の特徴から、「**パーソナリティタイプ**」「**職業適性**」「**学問適性**」などの領域で診断結果を表示
- 適性の高い職種・学問を、123職種、84学問からランキング表示
- 社会で活躍する社会人・学生約3万人の「興味・価値観・志向」に関するデータを基に診断

●リテラシーの構成要素

●コンピテンシーの構成要素

コンピテンシー			社会人基礎力 (経済産業省)	
対課題基礎力	課題発見力	問題の所在を明らかにし、必要な情報分析を行う	考え抜く力	課題発見力
	計画立案力	問題解決のための効果的な計画を立てる		計画力
	実践力	効果的な計画に沿った実践行動をとる		創造力
対人基礎力	親和力	円満な人間関係を築く	チームで働く力	発信力
	協働力	協力的に仕事を進める		傾聴力
	統率力	場を読み、目標に向かって組織を動かす		柔軟性
対自己基礎力	感情制御力	気持ちの揺れをコントロールする	前に踏み出す力	状況把握力
	自信創出力	ポジティブな考え方やモチベーションを維持する		規律性
	行動持続力	主体的に動き、良い行動を習慣づける（学習行動を含む）		ストレスコントロール
				主体性
				働きかけ力
				実行力

14 Kawaijuku Guideline 2022.10・11

札幌市立札幌開成中等教育学校

国際バカロレアで重視される

ATLスキルを軸に教育活動をデザイン

札幌開成中等教育学校は、国際バカロレア (IB) 認定校である。1～4年次にMiddle Years Programme (MYP) を実施し、5・6年次はIBのDiploma Programme (DP) コースと、独自設定のInquiry Programme (IP) から選択可能としている。

MYP、DPでは、ATLスキル (Approaches to Learning) の育成が重視されており、同校でも教育課程全体を通じて取り組んでいる。

「ATLスキルは『学習のアプローチ』と訳されますが、知識を習得する方法ではありません。本校で学んだ生徒たちに身につけてもらいたい資質・能力、社会で活躍するために必要な資質・能力として考えています」(MYPコーディネーター・Thomas Belshaw先生)

各教科・科目の授業では、単元末に「評価課題」が行われる。総括的評価の目的で実施される課題で、教科や単元による特性もあるが、複数のATLスキルを駆使することが不可欠な内容としている。

そして、単元内の各授業は評価課題に必要なATLスキルを一つ一つ分けて学ぶといったように、「逆向き設計」でカリキュラムが設計されている。たとえば数学では、「コミュニケーションスキル」を育成するために二次方程式を使って学ぶように、コンピテンシーベースの教育が展開されている。

4年次には、MYPの集大成として「パーソナルプロジェクト (PP)」に取り組む。MYPを通じて培った知識や能力、探究心を結集して行う活動で、生徒が自らの興味に基づいて探究活動を進める。テーマは「完璧なラーメンの作り方」「テニスが上手になるには？」など、生徒の興味・関心に応じたものとしている。

PPの最後には、学びのプロセスを振り返るレポートを執筆する。「計画」「スキルの応用」「振り返り」の3観点について、「どのような点で困って、ATLスキルをどのように発揮して解決したのか」等について、エビデンスを挙げながら執筆することを求めている。

このように、生徒はあらゆる教育活動を通じてATLスキルを意識して学んでいる。

ATLスキルの成長をPROG-Hを通じて裏付け

同校では、高校学年に相当する4～6年生でMMPを受験している。

「5年次以降にDPコースに進む生徒は、より高度にATLスキルを伸長することをめざして学ぶ一方、IPコースに進む生徒の中には、受験に目が向きがちになりスキルへの意識が薄くなる生徒もいます。日々の探究的な学習や受験勉強の中でATLスキルを意識し、振り返るきっかけとして、MMPを活用しています」(キャリア支援部長・山崎恒輝先生)

また、ATLスキルは定量的に評価することが難しいため、PROG-Hの結果を用いて、その評価の確からしさを裏付けたいという意図もあるという。

PROG-Hの結果を見ると、各学年、リテラシー・コンピテンシーともに多くの項目が全国平均を上回り、特に「統率力」「課題発見力」は非常に高い。これは、あらゆる活動をATLスキルの育成を意識して展開する、同校の教育の賜物だろう。

一方で、「感情制御力」などが低いといった課題もみられる。高校受験がない中等教育学校ならではの課題だが、「困難に直面したときに発展的に乗り越える経験ができるよう、教育プログラムや授業の中で工夫したい」と両先生ともに口を揃えて締めくくった。

参考 MMPのジェネリックスキルとATLスキルの対応表

ジェネリックスキル	ATLスキル (Approaches to learning)
コンピテンシー 経験を積み重ねて身につけた行動特性 対人基礎力 親和・協働・統率 対自己基礎力 感情制御・自信創出・行動持続 対課題基礎力 課題発見・計画立案・実践	コミュニケーションスキル 【コミュニケーション】 【社会性】 協働スキル 【自己管理】 整理整頓する力 【自己管理】 情動スキル 【自己管理】 振り返りスキル 【リサーチ】 情報リテラシースキル 【リサーチ】 メディアリテラシースキル 【思考】 批判的思考スキル 【思考】 創造的思考スキル 【思考】 転移スキル
リテラシー 知識を活用して課題を解決する力 情報収集力 情報分析力 課題発見力 構想力	

(MYP：原則から実践へ「ATLスキルの枠組み」を参照のうえ河合塾にて作成)

宮城県仙台第三高等学校

SSHでめざす「科学する力」と「自在な力」を PROG-Hを用いて客観的に把握

仙台第三高校は、普通科と理数科を持つ進学校である。理数教育や探究学習に力を入れており、2010年度以降、SSHⅠ～Ⅲ期の指定を受けている。

2017～21年度の第Ⅱ期では、

- 1 課題発見スキルに重点を置いた「科学する力」(サイエンス・リテラシー)の育成
- 2 グローカルサイエンスリーダーに不可欠な「自在な力」(グローバル・コンピテンシー)の育成
- 3 普通科への成果普及としての「SS探究」の開発を研究課題として取り組んできた。

「科学する力」と「自在な力」は<表1>の16項目からなる。これらの力の成長を、ルーブリック等を用いて評価すると同時に、「外的な指標がほしい」と考えMMPを導入した。

2021年度の2・3年生に、16項目について入学時と現在の状況を、ルーブリックを用いながら自己評価してもらった。さらに、自己評価の結果をPROG-Hの結果と結びつけて分析したところ、<表2>のような相関関係が見られた^(※)。

データから、普通科文系では「科学する力」「自在な力」と「対人基礎力」「対自己基礎力」の相関が強く出る一方で、普通科理系、理数科では少し弱まる。これは、教員の実感とも近いデータだったという。

たとえば「ディスカッションスキル」をとっても、文系生徒の場合は、テーマを問わないディスカッション

表1 「科学する力」と「自在な力」

科学する力 (f1)	自在な力 (f2)
課題発見	ローカル(個)とグローバル(一般)
情報収集	自己と他者
仮説構成	対言語主体的・能動的態度
条件制御	対IT・サイエンス主体的能動的態度
情報分析	協働での問題発見・開発
論理的思考	社会への還元
プレゼンテーション	失敗から学ぶ姿勢
ディスカッション	
論文作成	

ョン、より一般的なコミュニケーション力を念頭に自己評価する一方で、理系や理数科の生徒は、自身の課題研究など専門性の高いテーマ、尖った形のコミュニケーションをイメージした可能性がある。PROG-Hでは一般的な場面でのスキルを測定するため、コース間で関連の仕方が異なると考えられる。

そうした違いがみられるのも、自己評価とMMPによる外部評価など、複数の方法を組み合わせた多面的な評価のメリットである。

2022～26年度には、第Ⅲ期SSH指定を受けている。

STEAM教育に力を入れる第Ⅲ期では、これまでの実践研究を踏まえ、理数科では、実験を中心にテーマを追究する「イノベーション理数探究」などに取り組む。一方、普通科では、ビッグデータの解析や、地域連携により探究を深める「イノベーション探究」などに取り組むほか、理科、数学、情報、家庭、保健など、理系文系問わず学校設定科目で教科融合科目を多く設置している。さらに、育成をめざす資質・能力を「現状を把握できる」「目標を設定できる」「課題を解決できる」の3つとした。これは、海外の研究動向等を踏まえ、「科学する力」「自在な力」を再編統合したものだ。

これまでも高い評価を得てきた同校のSSHだが、不断の見直しにより、進化を続けている。

表2 「PROG-Hのコンピテンシーと「科学する力 (f1n)」
「自在な力 (f2n)」の相関関係

相関係数	理数科		普通科理系		普通科文系	
3年次 コンピテンシー	f1n	f2n	f1n	f2n	f1n	f2n
総合	0.229	0.190	0.233	0.219	0.298	0.292
対人	0.201	0.164	0.173	0.170	0.265	0.267
対自己	0.131	0.064	0.222	0.195	0.262	0.250
対課題	0.275	0.303	0.107	0.096	0.155	0.142
親和	0.145	0.138	0.192	0.202	0.133	0.152
協働	0.158	0.174	0.049	0.075	0.190	0.220
統率	0.169	0.094	0.124	0.101	0.235	0.209
感情制御	0.036	-0.005	0.098	0.067	0.174	0.154
自信創出	0.175	0.078	0.277	0.260	0.159	0.161
行動持続	0.188	0.162	0.171	0.160	0.309	0.297
課題発見	0.295	0.249	0.105	0.079	0.167	0.136
構想	0.130	0.182	0.029	0.025	0.150	0.145
実践	0.145	0.191	0.055	0.058	0.089	0.083

0.15以上のものは赤字、0.2以上のものは赤で塗りつぶしている

※分析の詳細は、仙台第三高校ホームページの「平成29年度指定スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書(第Ⅱ期・5年次 令和4年3月)」を参照

茨城県立並木中等教育学校

教科の授業で認知能力を 課題研究では非認知能力を育てる

茨城県立並木中等教育学校は、「Be a top learner!」を校是に掲げ、「人間教育」「科学教育」「国際教育」を柱とした、開校15年目の県立中高一貫校である。SSHに指定されており、アクティブラーニングや探究活動でも注目を集める学校だ。

同校では、育成したい能力として、知識の記憶力や知識の活用力といった認知能力と、課題を見つける力や行動力、論理的に思考し課題を解決する力といった非認知能力を挙げている。認知能力は主に5教科等の授業で身につけ、教科のテストで測定できる。一方、主に課題研究で育成する非認知能力は、教科のテストでは測定しにくい力だ。そこで、身についた非認知能力を“見える化”するため、MMPを活用している。

4年次・5年次の課題研究で試行錯誤 MMPの結果で自分の強みや伸長を言語化

同校の探究活動は、「一人一研」として、生徒の興味関心に合わせて、生徒が1人1つずつテーマを設定して取り組んでいる。27のゼミに分かれ、主に4年次（高1）と5年次（高2）の2年間、学年合同で話し合いながら、各々の探究活動に取り組む。4年次は、「自分の問いを見つける」ことを目標として、仮のテーマを設定して“お試し探究”を行ったうえで再考し、正式テーマを決める。テーマの設定に1年間かけるほど、自分の本当の問いを見つけることを大切にしている。探究のテーマは、必ずしも難しいテーマである必要はなく、身近な疑問を解決するものや、こうなったら便利だなといった内容でよい。企画研究部長の吉村大介先生は、「探究活動は、大学での研究の練習のようなもの。本当は何に興味があるかなど、自分を見つけることが重要です」と話す。

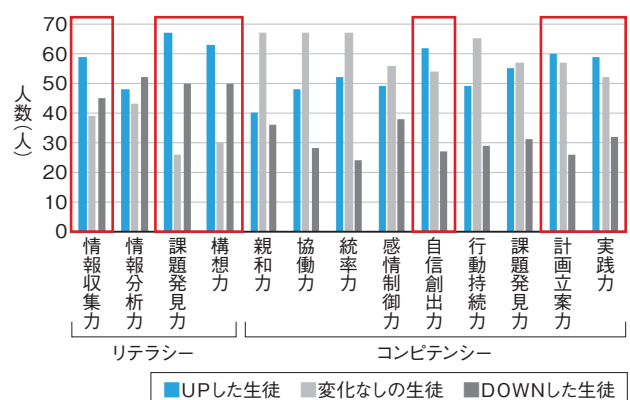
5年生は、「試行錯誤して課題解決する力の育成」を目標として掲げ、自分のテーマについて探究活動を行う。探究活動を調べ学習で終わってしまわないために、実験やフィールドワーク、インタビュー調査などによって、オ

リジナルデータをとるよう課していることも特徴だ。オリジナルデータをとることによって、発想力や行動力、試行錯誤する力が身につくというのだ。12月の校内発表会では、①試行錯誤しながら探究されているか ②工夫してオリジナルデータを取得しているか、またそれが探究に生かされているか ③探究テーマがユニークで面白い ④探究内容がユニークで面白い かの4点で評価している。この校内発表会の後、12月～1月にかけて論文を作成する。

では、2年間の探究活動を通じて身についた非認知能力は、実際にMMPでどのように“見える化”されているのだろうか。4年生と5年生の結果を比較すると、<図>のように、リテラシーでは情報収集力・課題発見力・構想力が、コンピテンシーでは自信創出力・計画立案力・実践力などが伸びている生徒が多いようだ。6年次には、こうしたMMPの結果をもとに、ワークシートに自身の強みを書き出し、自己PR文の作成も行っている。このワークでは、他の生徒から見た強みもフィードバックをもらうが、吉村先生は、「数値として出てくることで、生徒たちも『ここが自分の強みかもしれない』とディスカッションしやすいようです」と話す。

こうした自己PR文は、結果的に入試にも役に立っているが、入試のためとは言わないように心掛けているそうだ。「学力以外のものさし、それも、生きるためのものさしをたくさん作りたい。生徒が学力以外のものさしで、自分の強みを言語化できるようにしたい」と強調した。

図 4年生と5年生のジェネリックスキルの変化



鷗友学園女子高等学校

さまざまな活動を経験した後にPROG-Hを受験 強みを数値で確認し、志望理由書の作成に生かす

鷗友学園女子高等学校は、キリスト教の精神を基盤に「慈愛（あい）と誠実（まこと）と創造」を校訓とし、学力の充実とともに、社会性の獲得をめざす東京都の中高一貫の進学校である。同校は、社会の変化によって大学や大学入試も変わり、中学・高校での学びも変わってきていることから、生徒自身が社会で必要な力（ジェネリックスキル）に気づき、自分がどのような力を身につけているかを客観視できるよう、MMPを導入した。

同校の進路指導は、能動的学習者を育てるため、中学・高校の6年間を通して<表>のように設計されている。中学では自分と自分の身の回りから徐々に世界を広げ、高校では仕事や社会に目を向けていく流れだ。

具体的には、まず高1の4月お互いに褒め合うというルールの中で自分の関心事項を発表し、土台を作る。お互いを褒め合うということは自己肯定感の向上や他者承認につながる。こうした土台のうえで、R-CAPを実施して職業に目を向ける。夏にはオープンキャンパスに参加し、振り返りをポートフォリオにまとめる。

高2では、同校の中心学年として学園祭や運動会をとりまとめるなど、さまざまな経験をした後でPROG-Hを受験する。福井守明教頭は、「このタイミングで実施することに意味があります。さまざまな活動を経て身につけたこと、苦勞してわかったことが、客観的評価として顕著に数値で表れるからです」と話す。このPROG-Hの結果を踏まえて、2月に

は、大学への志望動機を明確にし、受験勉強への意識を高めるため、一般選抜を希望する生徒も含めて全員に志望理由書を書かせている。志望理由書の作成にあたっては、さまざまな活動にまじめに取り組

んだ生徒ほど、厳しく自己評価をしてしまう傾向があったが、PROG-Hの結果を参照することで、自分の長所が客観的に理解でき、新たな自分を知るきっかけにもなるという利点があるそうだ。

PROG-Hの結果は“生徒のカルテ” 高2から高3へ進路指導を円滑につなぐ

PROG-Hの結果は、生徒自身が活用するのみならず、進級時の引継ぎにも役立っている。

「本校では、生徒の個票はクラス担任だけでなく、学年の教員全員が見ています。高2で書いた志望理由書はクラス担任が赤入れし、ブラッシュアップしたものを高3のクラス担任に提出するのですが、高3で新しく担任になった教員にとっては、この志望理由書とPROG-Hの結果が“生徒のカルテ”となって、生徒自身を知ることによって役買っています。高3で初めて担任になった生徒に対して、そこから生徒のことを知るのでは、進路指導に遅れが生じます。調査書の所感を記載する際にも、志望理由書とPROG-Hの結果を参照しています」と話す。高2の段階で、PROG-Hの結果を学年団の教員全員で見えるのも、高3へのスムーズな移行を促す仕掛けになっているのだ。

「本校には、進路指導室がありません。教員全員が、あらゆる場面で生徒に寄り添える環境を作っているのです。本校にとって、MMPは学力と違う視座で重要になっています。卒業までに自分がどんな力を身につけたかを明確にして、生徒を大学や社会に送り届けたい」と福井先生は力を込めた。

表 進路指導6年間の流れ

学年	テーマ	主な内容
中学1年	環境	自分と自分の身の回りに目を向け、自分史を書く（レポート用紙12枚程度）。
中学2年	福祉	車椅子やシニア体験を通じて現代社会が抱える課題に気づき、自分の世界を広げる。
中学3年	職業と平和	職場訪問や見学を通じて将来の自分の姿を描き、11月には沖縄修学旅行で、平和をつくる人となることを自覚する。
高校1年	社会との関わりの中で、自らの進路を主体的に決定していく	R-CAPを実施して職業を知るきっかけにする。オープンキャンパスへの参加・レポートや大学との連携企画などを通じて、学部・学科研究を行い、自分の周辺世界を広げる。
高校2年		学校行事や部活動、修学旅行などさまざまな活動に中心学年として取り組んだ後、12月にPROG-Hを受験。この結果を踏まえて自分を俯瞰し、2月に志望理由書の作成に取り組む。
高校3年		4月に志望理由書をリライトして担任に提出する。PROG-Hの結果は、“生徒のカルテ”として、担任が変わってもすぐにフォローアップできるよう引き継ぐ。

愛知県立刈谷高等学校

3年間の課題研究を通じて

「科学する力」「エージェンシー」育成をめざす

刈谷高校は、東海地区でもトップクラスの進学実績を誇る進学校である。

2011年度からSSH指定を受け、2021年度からの第Ⅲ期では「科学する力とエージェンシーを発揮し、よりよい世界を創造する学際的サイエンスリーダーの育成」を研究課題としている。

ますます予測困難で制御が難しくなる世界において、自分にとってだけでなく「私たちの実現したい未来」の実現に向け、自らを舵取りできるサイエンスリーダーとして活躍するために必要な力を向上させることをめざしている。「科学する力」は、＜表＞の①～⑥の一連の過程を自律的に遂行できる力と、刈谷高校では定義している。

カリキュラムの特徴は以下の点などだ。

- ・3年間を通じて「課題研究」に取り組む
- ・第2学年でグループ研究
- ・第3学年で研究成果を発表（日本語・英語）
- ・第2・3学年の類型に「文系」「理系」に加えて「探究系」を創設

※理系：「理数」、文系：「社会」、探究系：「トランスサイエンス」に関する課題を研究

ルーブリックとMMPを組み合わせ

より妥当性の高い評価を追求

刈谷高校では、今年度から第1・2学年でMMPを受験している。その理由について、SSH主任の倉口哲先生は次のように語る。

「本校ではこれまで、独自に開発したルーブリック等を用いて、育成をめざす資質・能力を評価してきました。『科学する力』を場面ごとに細かく定義し、それらの力を発揮できたかを生徒自身が評価するものです。しかし、ルーブリックで評価できる資質・能力は部分的なものですし、生徒や教員の主観的な評価になりがちです。そこで、より広範な資質・能力を、客観的に評価できるMMPを併せて活用することにしました」

具体的には、MMPのリテラシーとコンピテンシーのうち、刈谷高校で育成をめざす「科学する力」や「エージェンシー」に近い能力をピックアップし、学年が上がるにしたがってどのように伸びていくのか、個々の生徒の結果を追跡したいと考えている。

今年度の結果を見ると、リテラシーやコンピテンシーは全体的に高いものの、気になる結果もあった。

進路指導主事の岩崎達哉先生は、「2年生で、『キャリア意識』の低い生徒もみられました。進路通信で触れるなどして、生徒に働きかけることを考えています」と話す。

刈谷高校の立地する愛知県三河地区は、世界でもトップクラスの自動車メーカーやその関連企業が集積し、生徒も保護者も「良い大学を出て、良い企業に就職し、定年まで勤める」というキャリアイメージを持ちがちだ。しかしこれからは、従来の仕事が無くなったり、仕事で必要なスキルが絶えず変化したりすることが予想され、人々が一生学び続ける必要がある。

刈谷高校では、MMPを受験することで、生徒に社会で求められる資質・能力を意識させ、学び続ける指針を示すとともに、キャリアに対する意識を喚起していく方針である。

表 刈谷高校で育成をめざす「科学する力」

①	自ら学術的問題を発見し、その問題を定義するとともに解決の方向性を決定する
②	問題に関する既知の知見や先行研究等の調査に基づき、解決すべき課題を設定する
③	課題解決のための論証可能性の高い仮説を設定し、見通しをもって仮説検証のための観察・実験・調査等を計画し、結果を予測しながら実行する
④	結果を科学的に考察するとともに、プロセスを振り返ることで、課題を修正したり、新たな課題を設定する
⑤	学術的問題の解決に向け、見通し・実行・振り返りのサイクル（AARサイクル）を粘り強く繰り返す
⑥	研究成果をポスターやプレゼンテーション等にまとめ、日本国内や世界に向けて発信する

須磨学園高等学校

生徒の自律的な学習と徹底した個人指導で 高い合格実績を実現

須磨学園高校は、神戸市須磨区にある私立高校である。中高一貫校だが高校からの入学生もあり、進路の希望に応じて3つの類を選択できる。

学校全体で「専門性」「人間性」「国際性」の3つの「生きる力」の育成をめざしており、少人数指導や個別指導を徹底して学力向上を図っているほか、「個人研究」や、「論理国語講座」、「飛び立て！未来のScientists！講座」など、大学での研究の基礎につながる活動にも力を入れている。

また、毎週金曜日の1時間目はPMTMの時間とし、目標を達成するために何をすべきか（PM：プロジェクトマネジメント）、それをいつするか（TM：タイムマネジメント）を書き出し、さらにTBM（To Be Myself）シートに「なりたい自分」を記入するなど、生徒が日頃から目標を意識し、自律的に学習している。

そうした取り組みの成果もあり、多くの生徒が難関大に合格しているほか、東京大学や大阪大学の学校推薦型選抜や総合型選抜にも合格者を輩出している。

PROG-Hから見える生徒の特長を

学校推薦型選抜・総合型選抜に向けた指導に活用

近年は、先述の大学以外にも、国公立大学を中心に学校推薦型選抜や総合型選抜で受験を考える生徒が増えてきている。希望する生徒についてはバックアップするものの、学校推薦型選抜・総合型選抜に向けた準備は、一般選抜とは異なる部分もあり、生徒によっては負担が大きい場合もある。

そこで、山本理貴副校長は、「学校推薦型選抜・総合型選抜への適性を、より客観的に判断できる指標はないか」と考え、MMPを導入した。

現・高3生は、2年次の4月と2月にPROG-Hを受験した。結果を見ると、難関国立大をめざす生徒で「対課

題基礎力」が高い傾向があった。また、たとえば日頃からよく考え、学習方法を工夫している生徒は「課題発見力」や「実践力」が高いなど、担任の先生方の肌感覚とも近い結果が出たという。

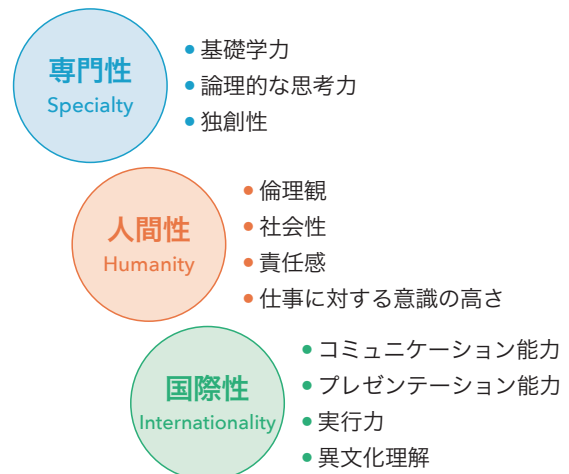
また、「統率力」「実践力」「構想力」などが高い生徒が、1学期の文化祭でリーダーやサブリーダーを務めるクラスもみられた。

他方、部活動や学校行事でリーダーをしていなくても、「統率力」や「課題発見力」が高い生徒などもおり、自分でも気づいていなかった長所が数値化され、自信につながった生徒もいるという。

そのほかにも、全生徒の結果を学年団で共有することで、「あの生徒はこんな力を持っていた」など、教員同士のコミュニケーションを促すツールにもなったそうだ。学校推薦型選抜・総合型選抜を考える生徒に向けては、5月に説明会を行い、夏休み以降、入試方法や出願先の検討を行っていく予定である^(※)。教科等の成績などのほか、PROG-Hの結果も参考にすることで、それらの検討が深まるほか、個々の生徒により適したサポートが可能となると考えている。

さらに、「今年度の高3生の入試結果が出たら、合否の状況とPROG-Hの結果を紐づけて分析したい」と山本副校長は展望を語ってくれた。

図 3つの「生きる力」



※取材は8月上旬に実施した。

面談

キャリア

効果測定

GS育成

調査書

六甲学院高等学校

低年次から職業や学問を意識させるため

R-CAP受験など1年次のキャリア教育を強化

六甲学院高校は、神戸市灘区にある完全中高一貫教育を行う、イエズス会の私立学校である。「他者に仕えるリーダー」となるために4つの人間性（4 C's : Compassion, Competence, Conscience, Commitment）の育成をめざし、さまざまな教育の取り組みを行っている。

近年は、キャリア教育の内容を見直し、早期から意識を高めることに力を入れている。高校第1学年のキャリア教育の流れは＜表＞の通りである。

まず4月に、R-CAPを受験する。

「本校は高校からの生徒募集を行っておらず、高校入試を経験しないこともあり、進路へのイメージが漠然としている生徒もいます。そのような中、高2から文理でクラスが分かれるため、職業や学問について高1の夏休みくらいまでに考えさせる必要があります。そこで、新学期早々のこの時期に実施しています」（進路指導主任・森本亮介先生）

5月の中間考査が終わった頃には、卒業生講演などと合わせてR-CAPの結果を生徒に返却する。同じ時期に進路行事を重ねることで、生徒の意識を高めることを狙っているようだ。

1学期後半に実施する保護者面談でも、R-CAPの結果を紹介している。森本先生が過去に経験した次のような例でも、データに基づいて助言することで、より納得感

のある文理選択ができるようになって考えられる。

- ・本人は文系に進みたいが、保護者の意向により理系クラスに進んだものの、現役では志望校に合格できず、その後に文転した卒業生
- ・就職を考えると理系に魅力を感じるが、文系の学問にも興味があり、進路選択に悩む生徒

ただし、R-CAPはあくまで傾向を示すものであり、個々の生徒が興味のある職業や学問の適合度が高く出ないこともある。しかしそれも、「本人が考えていなかったいろいろな一面を見出すきっかけ」として捉え、適合度の高い職業や学問にとらわれすぎないように助言しているという。

また、保護者面談の際に、R-CAPの結果について「ご家庭での話のタネにしてください」と声掛けしているそう。家庭でも適性のある職業などを話題にしてもらうことで、日常の中で進路について考えるきっかけができていく。

これらの取り組みを通じて進路について考える機会をつくり、夏休みには実際に各自で大学を訪問する。とくに今年度より、キャリア教育を充実させる観点から、卒業生が実際に活躍する姿を見せようと、職場訪問を開始した。中でも東京研修に関しては、定員45名のところ、倍近くの生徒が希望し、抽選となった。森本先生は今後について、「こうしたキャリア教育を定着させるとともに、中3など、より低年次からも職業意識を深める取り組みを行いたい」と締めくくった。

表 六甲学院高校の第1学年のキャリア教育の流れ

月	活動内容	ねらい
4月	R-CAP受験	・進路について考え始めるきっかけとする
5月	「進路の日」 ・30～40代の卒業生の講演 ・進路主任による講話 ・R-CAPの結果を返却	・R-CAPの結果返却を、進路講演と同じ日に実施することで、進路選択に対する生徒の意識を高める
1学期後半	三者面談	・現段階における子どもの学校での様子や、家庭における様子などを情報交換。将来のことに関する家庭での対話を促す
夏休み	大学オープンキャンパスへの参加 職場訪問 ・神戸、大阪、東京から選択	・六甲学院高校を卒業生した先輩方の話を聞くことで、大学や、その先の職業のイメージを広げる。同時に「働く意味」と「いまの勉強が将来とどうつながるか」を考えさせる
9月	文理分けガイダンス	

佐賀県立佐賀西高等学校

入学者の変化を受け

リテラシーや学習習慣の把握の必要性が高まる

佐賀西高校は、藩校・弘道館の流れを汲む、全国でも屈指の伝統校である。

入学者の多くは、県内の中学校の成績トップ層で、真面目な生徒だが、近年は学力や学習状況も変化してきている。たとえば、

- ・議論や発表に慣れている一方で、物事を深くじっくりと考える経験が十分でない
 - ・『読む』『書く』『聞く』『話す』といった学習活動を統合的に行うことが苦手
 - ・授業中に教員が口頭で話した内容をメモしながら、板書を写すなど、小さな習慣が身についていない
- といった生徒が増えてきた。

また、佐賀県の高校入試は全県下同じ問題であり、佐賀西高校の入学者にとっては入試直前の短期間の学習で対応して高得点を取る生徒も多い。そのため、学習習慣が身につかないまま入学し、入学後に予習を前提とする高校の授業のペースをつかみきれないといった課題もあった。

そこで、これらの基本的なリテラシーや学習習慣を客観的に把握し、面談や学習指導に生かしていきたいと考え、今年度の1年生からMMPを導入した。

言語化・数値化されたデータに基づき

先生方が自信をもって面談を実施

今年度の1年生は、入学直前の3月中旬にMMPを受験。4月中旬の宿泊研修において結果を返却し、結果の見方に関する講演を聴講した。

そして4月下旬に、MMPの結果を踏まえて面談を実施した。

実際に面談を実施した先生方からは、「言語化・数値化されたデータに基づいて面談を実施することで、生徒に対して漠然としてもっていたイメージを裏付けることができ、自信をもって接することができた」といった感想が聞かれたそうだ。

また、PROG-Hを体験受験した先生方からは「リテラシーの問題は意外に難しかった」「入学前の生徒が解けるのか」という声も挙がったが、実際にはしっかりと得点できる生徒もあり、佐賀西高校の生徒の潜在的な資質・能力の高さを感じさせる結果であった。

今後の利用法については検討中で、「まずは目の前の生徒の状況を把握することに注力」としつつも、「今回の結果と、高校での成績や、3年後の大学入試の結果等をひもづけ、本校独自の指導用データとしていきたい」と、進路指導主事の吉田佳代先生は展望を語った。

表 佐賀西高校の第1学年面談スケジュール

	面談の主な目的
3月	(MMP受験)
4月	学校生活(生活面、学習面、人間関係等)への適応を確認する
6月	学習習慣が定着しているかを確認する
7月	1学期の総括と夏季休業中の過ごし方について指示する
9月	学校祭後の学習習慣について確認する／文理選択について
11月	文理選択について意向確認 ^(※)
12月	文理選択について最終決定 ^(※)
1月	1年の総まとめと次の学年への展望
2月	春休みの過ごし方について指示する

(※)は適宜実施、ほかは学校全体で面談を設定している日程

鹿児島県立鶴丸高等学校

R-CAPの結果を用いて

進路に対する生徒の視野を広げる

鶴丸高校は、1894年創立の鹿児島県尋常中学校をルーツとする、県内で最も長い歴史を持つ高校である。政財界や学術界の非常に幅広い分野に国内外を牽引するリーダーを輩出してきた。そのような先輩方に憧れて、毎年難関大志望者が多く、最近では医学科志望者も多い。

しかし、医学科志望者の中には、成績が良いからとりあえず医学科をめざす生徒や、他の職業をあまり知らない生徒や、医師ではない職業に適性のありそうな生徒、どちらかと言えば文系の学問に向いていそうな生徒などもみられる。

他の進路を志望する生徒にも、現在考えているもの以外にもいろいろな学問や職業があること、思いもよらなかった学問や職業に適性があることを伝えたいと考えていた。さらに、難関大にも目を向けさせたいという思いもあった。

また、生徒の学問や職業への適性や、受験勉強への適性は、普段の学習の様子や学校行事や部活動などに取り組む姿などを見て、教員も経験的、感覚的に捉えてきた。しかし、特に進路変更を勧めるときなどは、生徒になかなか伝わらないこともある。そこで、客観的なデータを根拠として示すことで、より納得感のある進路選択を促したいと考えていた。

それらを背景に、鶴丸高校はMMPを導入した。

実力テストとR-CAPの結果を結び付け

多面的な視点から面談を実施

今年度は、第1学年の5月にR-CAPとLEADSを実施した。入学後早い時期に実施することで、生徒の進路適性や学習習慣を早期に把握することが目的だ。

1学年主任の稲森成智先生は、「結果は概ね、私たち教員が生徒に対して持っていたイメージと近いものでした。予想通り、医学部医学科の志望者だが文系の学問への適合度が高く出ている生徒もあり、面談で志望学部等を確認する必要があるだろう、と担任の教員とも話題になりました」と話す。

6月の面談は、学校で独自に実施している実力テストの成績や、R-CAPの結果などに触れながら実施した。

多くの生徒は結果を素直に受け止めたが、一部の生徒からは、「志望学部は決まっているのに、全く異なる学問の適合度が高く出た」といった戸惑いの声も挙がったという。こうした生徒にどのような声をかけるかなど、面談等での扱い方については、さらなる検討が必要と感じている。

稲森先生は、実力テストの成績と、R-CAPの結果を結び付け、<表>のような資料を作成した。たとえば理系志望でも、数学を苦手としている生徒や、R-CAPから得られる「興味のある学問／仕事分野」では、文系の学問・仕事が多く挙がる生徒もみられる。今後、面談等における参考資料として活用することも検討しているようだ。

表 実力テストとR-CAPの結果を結び付けた資料（抜粋）

氏名	進路希望	文理希望	校内偏差値				興味ある 学部系統	興味ある 仕事分野	理系← →文系
			3教科	国語	数学	英語			
	国公立大	理系希望	42.5	53.3	41.6	40.5	文・人文	音楽・イベント	■■■■■■■■■■□□
	私立大	文系希望	51.5	52.7	47.9	54.9	文・人文	公務員・法律・政治	■■■■■■■■■■□□
	国公立大	理系希望	35.7	32.5	37.6	44.1	社会・国際	公務員・法律・政治	■■■■■■■■■■□□□
	国公立大	理系希望	65.6	65.6	63.9	58.5	医・歯学	医師・歯科医師	■■■■■□□□□□□
	国公立大	文系希望	60.3	61.3	52.9	63.9	文・人文	国際・語学	■■■■□□□□□□□
	国公立大	理系希望	68.8	58.8	64.2	71.1	理学系	自動車・航空・宇宙	■□□□□□□□□□

（稲森先生作成資料から抜粋）